



Report

両者の蜜月を示す出来映え 「マイ・ベスト」と語った《フィデリオ》

ベートーヴェンの《フィデリオ》を数々のオーケストラと共演して来たパーヴォ・ヤルヴィが、首席指揮者を務めるチューリヒ・トーンハレ管弦楽団で6月16、18日によくやく実現に漕ぎ着けた。今回はエヴァ・ブッフマンの演出によるセミ・ステージ上演だった。

冒頭から凄まじいエネルギーを発散させて、ヤルヴィは挑戦的にオーケストラを引っ張っていき、「序曲」は最後まで攻め抜く。物語の進行はベートーヴェン役の俳優が実在の手紙等を読んで進めていく。ヤキーノ役のパトリック・グラールとの二重唱、そしてアリアも上手くこなしたマルツェリーネ役のカタリーナ・コンラディは四重唱でも光り、レオノーレ役のジャクリーン・ワーグナーも完璧な歌唱で応える。よく響く管楽器が少しうるさいほどの弱声で、4人の独白が美しい。ロッコ役のクリストフ・フィッシュエッサーは一時期より声に艶が戻ってきた。ピツァロ役のシェンヤンは、伸びる声で脅す。チューリヒ・ジングアカデミーの合唱もよいエネルギーを発した。レオノーレのアリアでは集中力が倍増し、頭声から上手に胸声につながる歌唱技術で覚悟を高らかに歌い、拍手に包まれた。

第2幕はお待ちかねのフロレスタンのアリアで好調に滑り出すが、最後のほうは喉がどンドン詰まっていくようで、声が細くなり苦しそう。それでも大きな破綻はなく、ロッコとレオノーレとの三重唱では緊迫感を上手く出した。そしてベートーヴェンの音楽が高らかに響く輝かしいフィナーレで終幕となった。

以前ドイツ・カンマーフィルと同曲に取り組んだヤルヴィは、作曲当時の規模に近いオーケストラで、ドイツの音だが細身の軽いアプローチで最高の演奏だと思わせた。NHK交響楽団との同曲上演後には「いままででベストだった」と自信満々に語った。そして今回、トーンハレ管との初日を終えてのパーティでは、「今晚がマイ・ベストだ」と言い放った。彼の「ベスト」はつねに更新されていくようで頼もしい。

(取材・文=中東生)



パーヴォ・ヤルヴィほか、《フィデリオ》のキャストたち

